

学位論文の内容の要旨

氏名

蔭山 光代

論文題目

Comparison of ICare Rebound Tonometer with Noncontact Tonometer in Healthy Children.

(論文要旨)

【目的】

アイケア手持ち眼圧計 (ICare) と非接触型眼圧計 (NCT) を用いて小児の眼圧測定を試み、その有用性について検討した。

【対象および方法】

対象は2007年7月～8月、2008年4月～5月に香川大学医学部附属病院眼科斜視・弱視外来を受診した小児180例(男児96例・女児84例)である。斜視、屈折性弱視、斜視弱視以外の疾患を有さない小児を対象とした。年齢は0歳～15歳(平均年齢 6.4 ± 3.1 歳)でICareとNCTを同日測定し、片眼しか測定できなかった場合は測定不可とした。

ICareの測定方法は、座位にて測定を行い、点眼麻酔を使用せず測定した。サポート部を患者の額にあて、プローブの向きを角膜中心部にむけて水平に保ち測定した。ICareは6回測定し、上下値を省いた4回の平均値が結果として表示される。

ICareとNCTの有用性についてはマクネマー検定を用いて検討した。

【結果】

ICareとNCTの両者とも測定できた小児は124名、ICareのみ測定できた小児は36名、NCTのみ測定できた小児は6名、両者とも測定不可であった小児は14名であった。ICareの方が有意に測定可能であった。 $(P < 0.05)$ 年齢別に検討したところ、0歳～3歳までと4歳～6歳まではICareの方が有意に測定可能であった。ICareが測定可能であった最小年齢は6か月児であった。NCTが測定可能であった最小年齢は2歳であった。また7歳以上は両測定機器による差を認めなかった。NCTとICareの測定値の比較において、右眼のNCTおよびICareによる眼圧値はそれぞれ 15.9 ± 2.3 mmHg、 15.1 ± 2.6 mmHgであった。左眼のNCTおよびICareによる眼圧値はそれぞれ 15.1 ± 2.6 mmHg、 13.9 ± 2.9 mmHgであった。両眼ともにNCTの方がICareより眼圧が高く測定される傾向にあった。

【結論】

小児においてNCTは130例にICareは160例に測定可能であった。6歳以下の108例の小児に限るとNCTは59例であったのに対して、ICareは90例で測定可能であった。通常、乳幼児の眼圧を測定する際には従来の眼圧計では覚醒時の測定が困難であるため、麻酔下にて眼圧を測定しなければならない。しかし麻酔下にて眼圧を測定する場合、使用する薬剤により呼吸抑制等を生じる可能性もある。ICareは覚醒時に非侵襲的に検査ができるため、乳幼児を含めた小児の眼圧測定が可能であった。また測定にあたり熟練を要せず、短時間で測定できる。特に6歳以下の乳幼児では測定機器として有用であると考えられた。

ICareは小児の眼圧測定が必要な症例、例えば先天緑内障、先天白内障の術後眼圧管理等において有用な検査機器であると思われる。

(This area is intentionally left blank for the author to provide a detailed summary of the paper's content in Japanese, as per the instructions below.)

掲載誌名	Journal of Glaucoma		第 20 巻, 第 1 号
(公表予定) 掲載年月	2011 年 1 月	出版社(等)名	Lippincott Williams & Wilkins
Peer Review	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無		

(備考) 論文要旨は、日本語で1,500字以内にまとめてください。